

『怪談牡丹燈籠』における指定表現

ソン ユンア
成 琺 珂

1. はじめに

『怪談牡丹燈籠』（以下、『牡丹燈籠』）は、明治17年に三遊亭円朝の人情話の口演を若林珪蔵が速記・出版したもので、速記法という言語の直接描写という長所を生かし、円朝の口演を写實的に描写、活字化し語り口をほとんどそのままに伝え人気を呼んだ。その速記者である若林珪蔵も「序詞」で次のように述べている。

「其說話を聞く恰も其實況を見るが如くなるを従て聞けハ従て記し片言隻語を洩さず子が笑へバ筆記も笑ひ子が怒れば筆記も怒り泣バ泣き喜べバ喜び嬢子の言ハ優にして艶に僮夫の語ハ鈍にして訛る等所謂言語乃寫真法を以て記したるがゆゑ此冊子を讀む者ハ亦寄席に於て圓朝子が人情話を親聽するが如き快樂あるべきを信ず以て我が速記法の功用乃著大なるを知り玉ふべし但其記中往々文体を失し抑揚其宜きを得ず通讀に便ならざる所ありて尋常小説の如くならざるは即ち其調を爲さざる言語を直寫せし速記法たる所以にして我國に説話乃語法なきを示し以て將來我國の言語上に改良を加へんと欲する遠大の目的を懷くものなれば看客幸ひに之を諒して愛讀あらんことを請ふ」^{*1}

話し言葉は出来るだけありのまま、言われるまま再現しようとしたということで、『牡丹燈籠』は言文一致の嚆矢ともいわれ、^{*2} 坪内逍遙・二葉亭四迷・山田美妙に強い影響を与えた。また、当時の社会の言語的習慣が反映されているという特色から、日本語史上の重要資料として利用されてきた。しかし一方で、『牡丹燈籠』における指定表現の様相は十分に明らかにされたとは言いがたいと思われる。

そこで本稿では、『牡丹燈籠』の指定表現にみられる(1)種類と用法(2)身分や性別・職業別の使い分け(3)登場人物別による使いわけ(4)心理状態・感情変化などによる使い分けについて調べ明治10年代の指定表現の一端を明らかにしたい。なお、本稿での『牡丹燈籠』の底本には、日本近代文学館編名著復刻全集近代文学全集を用いた。

2. 『牡丹燈籠』の口語性について

清水(1983a)によると、『牡丹燈籠』は言語資料として二重的性格(特に高座口演と速記本文章の二重性)を持っていると結論付けられている。速記術という「言語の寫眞」技術の確立が前提になるわけであるが、実はその速記された原稿に、さらに後から手を入れたようであるという。つまり、講談という場の枠を嵌めた口述筆記という装置を仮設することによって作られたものが、速記本講談小説という様式なので、そこから実際の口演とは差が生じられる。確かに正確な意味伝達のためには、ある程度の添削は要るだろうと推測できる。

しかし、一方速記者は上の序詞でもあるように、速記者自身は口演のありのままを写そうとする意志は持っていたものと考えられる。言語資料として二重性という面を考慮に入れる必要はあるが、口演をそのまま写すという性格の面から口語資料として意味あるものと判断できる。

また、明治時期の日本語研究者であるチェンバレン(B. H. Chamberlain, 1850 ~ 1935)が明治21年(1888)に出版した“A Handbook of Colloquial Japanese”の「Practical Part」に『牡丹燈籠』が収録されており、収録の理由を次のように述べている。

日本の書記法を学ばなくても日本語を完全に話せるようにすることは可能である。残念ながら、話しことばを習得しても本や雑誌・手紙の理解には大して役に立たない。たとえそういう物を学習者に大きな声で読んで聞かせたとしても、日本人はまだ我々の中世の頃のような状態にある。話すように書かず、物を書く時にはいつも古めかしくまた実はいくらか人工的な文体を使うのだ。いわゆる「文語」である。話しことばで書かれた書物の中で最もすぐれているのは現存の作家円朝の物語である。学習者は文字について悩みたくないと思ったらこれらの本の一冊を教師の口述で書取るのが一番よい。序でにいえば、女性の学習者が腹を立てるような箇所が少なくない。^{*3}

上でわかるように、当時話し言葉と書き言葉の隔たりが大きかったが、『牡丹燈籠』は、話し言葉で書かれているので日本語の学習書の教材として受け入れたということである。こういう点に鑑みれば『牡丹燈籠』は多くの作家を言文一致運動に導いた立派な口語資料とみていいだろう。

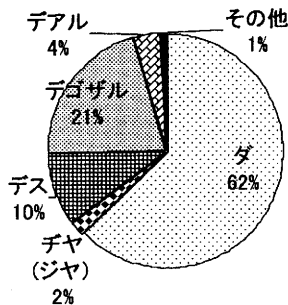
3. 『牡丹燈籠』における指定表現^{*4}

福沢諭吉の『福翁自伝』には、江戸時代から明治時代初期までの言葉が、同じ地域でありながら、身分・職業・性別などに応じて異なっていたことが指摘されている。文末は断定や推量などの表現内容によって規定される場合と、敬意や丁寧さの度合いによって多様な変化を見せる。そこで、『牡丹燈籠』に見られる指定表現には、どういう種類があるか。また、それらは身分や職業・性別そして年齢によってどのように言い分けられているかという使用状況をまとめて報告し、文末形式と話者の表現意図との関わりについて、話者がどのような表現形式を選択して意図した言語行為を機能させるのかを追究してみたい。

まず、『牡丹燈籠』の指定表現を語形から大きく分類すると、次のようになる。

- (1) ダ系・・・ダ・チャ(ジャ)
- (2) デゴザル系・・・デゴザル・デゴザリマス・デゴザイマス
- (3) デス系・・・デス
- (4) デアル系・・・デアル・デハアル・デモアル
- (5) その他・・・デガス・デゴゼヘヤス・デゴゼヘマス・デゴジイマス^{*5}

上の使用現況をグラフで示してみると次のようになる。



【図1】『牡丹燈籠』における指定表現の使用率

ダが865例、チャ(ジャ)が26例、デスが138例、デゴザルが284例、デアルが51例、そして、ヤス・デガス・デイラツシヤルが合わせて11例用いられて、グラフでみられるように、ダ系>デゴザル系>デス系>デアル系>チャ(ジャ)系>その他の順序で用いられたことがわかる。

これから、このような使用状況を念頭にいれながら、各指定表現がどのように用いられたか具体的に見ていくことにする。客観的に把握できる待遇表現関係者の身分関係や性別・年齢などをよりどころとして、なおかつ話者の心理状態も考慮に入れながら用例からその待遇法の性質や機能を把握する。

3. 1. ダ系

3. 1. 1. 「ダ」

「ダ」は、『牡丹燈籠』において、「ダ」(771例)・「ダラウ」(78例)・「ダツタ」(11例)の活用をしている。指定表現の62%を占めている。〔図1参照〕

「ダ」の終止形は、体言またはノ・モノ・ン・コトなどのような準体助詞・形式名詞に続いて用いられる。そして同時に上の叙述をさらに強めたり、これを他に説明する場合などに用いられ意味を明確化する役割をしている。

- (1) 夫ぢヤア僕一人憎まれ者になるのだ(志→新) 第一編 12才④
- (2) 草履取の身の上でお前は御門さへ守て居ればよいのだヨ(国→孝助) 第二 26才③
- (3) 其處を避けて通る様になると廣い所へ出られるものだ(飯島→孝助) 2編 41才③
- (4) 顔をしたから明日ハ屹度剥しますと云て歸へしたんだ(伴→峯) 4編 15才③
- (5) 大層綺麗な女で綺麗程尚ほ怖いもんだ(伴→峯) 4編 16才⑧
- (6) 何でも大變な作物だそうだとそれを盗むんだがどうだへ(伴→峯) 5編 28才③
- (7) 孝助どんハ不斷の氣性にも似合わない事だと存じまして(竹→飯) 6編 35才⑥
- (8) 道德高き名僧知識ハ百年先の事を看破るとの事だが貴僧の御見識誠に恐入りました(相川→良) 7編 14才⑩

推量の「ダラウ」に接続する場合には、(9)～(13)のように介さず用言に直接接続している用例と(14)～(16)のようにノ・ン・もの・事などの準体助詞や形式名詞を介している用例とが混在している。

- (9) お徳と云ふ十八ばかりの娘が有るだらう(源→相助) 4編 3才①
- (10) 屹度不屈な奴相助を暇いしてしまうと仰しやつてお暇に成なるだらう(源→相助) 4編 4才②
- (11) 屹度剥ませうとおいひヨ怖いだらうがお前ハ酒を呑めバ氣丈夫になるといふから(峯→伴) 4編 16才⑨
- (12) どうも旨いねへ運が來たんだヨ其如來様はどつかへ賣れるだらう(峯→伴) 5編 28才⑬
- (13) これハマア嘸お疲れでございますだらう(相→孝) 11編 2才⑫

- (14) 此奴わからぬ奴だナ手前だツて亭主を持たから子供が出来たのだらう
 (相川→婆)7編 11ウ④
- (15) 身の上も何もかも當りハしまいが強情を張て胡麻かさうと思つたのだらう
 (相→孝)11編 13ウ⑦
- (16) おかさまは芝居でも御見物なすつて御歸りになる事だろふから中々ト
 月やニタ月ハ故郷忘じ固い難して彼地此地を御廻りなさるから(五→り)
 12編 16㊦

<表1> 各指定表現の使い分け

	合計	女 ↓ 男	女 ↓ 女	男 ↓ 男	男 ↓ 女	地 の 文	独 り 言 *6	身 上 ↓ 下	身 下 ↓ 上	年 上 ↓ 下	年 下 ↓ 上	対 等
ダ	865	163	5	446	172	70	19	274	37	240	65	210
ヂヤ(ジヤ)	27	0	0	26	0	1	0	7	0	15	0	0
デゴザル	184	28	7	99	36	14	8	94	14	79	11	184
デス	138	41	1	66	17	11	0	19	68	14	22	26
デアリマス	40	0	2	33	6	8	0	13	9	14	3	5

<表1>は、各文末が使われた用例数と性別・身分別(上下)・年齢別に分けて使用の数を示したものである。なお、地の文か会話か独り言であるかも分けて検討した。地の文と独り言の以外はすべてが会話文の集計である。会話文・地の文・独り言すべての指定として一番多く用いられたのは、「ダ」である。<表1>の「ダ」の項を参考にしてみれば、「ダ」を使っている用例の中で性別使用例は、168例：618例で女性より男性が圧倒的に多く、身分が高い人が低い人に対しての使用例及び年上の人から年下の聞き手に向かってよく使われている。また、話し手と聞き手が対等な関係の場合にも「ダ」が多く用いられている。つまり、「ダ」の使われる人と人との関係から、目上の人から目下の人に、そして対等な立場の者同士で用いられることがわかる。

下位の話し相手に対して、上位の話し手が用いたり、もしくは対等に相互に用いた言葉遣いである。対等な関係では、親愛感をもって対話する場合に用いられるが、粗野で、隔意ない感情の交流を示す言葉として、下層階級に多くみられる傾向がある。

次は話し手の身分の変化によって指定表現が変化する例で、草履取りの身分であった孝助は、(17)～(19)のように、最初に主人の妾や甥である源次郎に敬意を表わす「デゴザイマス」や「デス」を用いていた。

- (17)庭も奥も守りますへい方々を守るのが役で御座います(孝→国)2編 26才④
 (18)書付が出たから私の方が負に成つたのですが何方が悪ひか篤と貴君の胸に
 聞いて御覽遊ばせ私ハ御當家様の家來で御座います(孝→源)2編 28才⑩
 (19)さつぱり存じませندとう致したのでせう(孝→国)5編 24才⑤

- (20)卑怯だ源次郎や女を茲へ出して雑木山に隠れて居るか(孝→源)13編 30才⑩
 (21)此の孝助が參て手前と争た所が手前ハ主人の手紙を出しそれを証據だと云て
 よくも孝助を弓の折れで打たな(孝→源)13編 31才⑩
 (22)樋の口屋の位牌へ對して濟まんと道まで教へて下すつたなれども自害をな
 すつたも手前のゆゑだ(孝→国)13編 32才⑤

しかし、身分が変わり、13編の敵討ちの場面では、主人の仇であるお国と源次郎に
 対面した時には、自分より目下や同等な立場の者に使う「ダ」を用いている。(20)から
 (22)の用例で「ダ」が使われる場面では、感情の激しさという心理的な要素も表れた例
 である。

3. 1. 2. ジャ(ヂヤ)

「ジャ(ヂヤ)」^{*7}は、[図1]のグラフにもあるように全体の指定表現のうち、その
 使用率が2%(27例)に過ぎない。4章にある<表2>を参考にすると、「ジャ(ヂヤ)」
 を用いる人物も限られている。『牡丹燈籠』の第一編で侍である飯島が刀屋の主である
 藤新(2例)・奉公人である孝助(5例)に対して用いている。

同じ侍の身分である黒川が飯島に向かって1例用いている。また、良石という和尚が
 相川と孝助に対して(11例)、新三郎に対して5例用いている。最後に町人の伴蔵の甥
 である久蔵が伴蔵の妻である国に対して2例用いている。

- (23)頼だ應良な者拙者の鑿定する所では備前物の様に思はれるが如何ぢやナ
 (飯→藤)一編 2才③
 (24)エーイ其は買とも買はんとも貴殿の御勝手ぢや(黒→飯)一編 3才⑨
 (25)其方は究屈な武家奉公を仕度といふのは如何な譯ぢや(飯→孝)一編 14才⑨
 (26)其方の叔父は何商賣ぢやノ(飯→孝)一編 14才⑩
 (27)親へと聞かれて涙を流すとは親孝行な奴ぢやナ(飯→孝)一編 15才⑩
 (28)海の音といふ如來さまが降て來るといふのはじや(良→新)3編 48才④
 (29)夫れハ誠に心懸の尊い事じやと云て貸たのが即ち此お經じや(地の文)
 4編 48才⑦
 (30)私が行て其女に逢て頼みませう其女は何者じや藝者かなんだ(相川→孝)

6 編 44 ㊦④

- (31) いつでも厄介になりつづけたが折角の思召しだから頂戴いたして置ますべいオヤ探つて捨た所ぢやア(久→峯)8 編 18 ㊦⑩
- (32) 孝助殿ハ器量と云ひ人柄と云ひ立派な正しい人じや中々正直な人間で餘程利口じやがお前ハ粗々かしそうな人じや(良→相川)10 編 8 ㊦⑩
- (33) 佛説にも利劍頭面に觸るゝ時如何何といふ事があつても其時が大切の事じや(良→孝)10 編 10 ㊦⑦

つまり、「ジヤ(ヂヤ)」は、侍や和尚などの限られている身分や職業の人が、そして女性が使った例が1例もなかったことから女性よりは男性が主に使っていたことがわかる。上の用例でみられるように、目上の人が目下の人に主に使われているところは3. 1. 1で考察した「ダ」と共通しているが、「ダ」が比較的多様な職業や身分・性別の人に使われたことに対して「ジヤ(ヂヤ)」は、相当限定的な言い方であると考えられる。

チェンバレンは“A Handbook of Colloquial Japanese” (by Basil Hall Chamberlain 1891, 2 版)の「Practical Part」に『牡丹燈籠』の一回と二回を日本語のローマ字綴り(『BOTAN TŌRŌ』)とそれの英訳を収録している。そこには、日本語版での「ジヤ(ヂヤ)」が次のように「ダ」に置き換えられている。

(34) 頓だ應良な者拙者の鑑定する所では備前物の様に思はれるが如何ぢやナ
(飯→藤) 一編 2 ㊦③

(34)' *Samurai: "Tonda yasasōna mono. Sessha no kantei suru tokoro de wa, Bi zen-mono no yō ni omowareru ga, -dō da, na?"*

(35) エーイ其は買とも買はんとも貴殿の御勝手ヂヤ(黒→飯島) 1 編 3 ㊦⑨

(35)' *Yopparai: "Ei! Sore wa, kau to mo kawan to mo, anata no go katte da"*

(36) 否々全く刃がよいどうぢやナ(飯→藤)一編 6 ㊦①

(36)' *Samurai: "Iya! Iya! Mattaku hamono ga yoi. Dōda, na?"*

上の用例のような「ダ」の入れ替えと関連して、チェンバレンは“A Handbook of Colloquial Japanese”で次のように述べている。

¶ 347 *Ja*, as a verb, is not heard from the lips of Tōkyō speakers. But in the Colloquial of Kyōto, in the language of the stage, and frequently in printed Colloquial (so-called), it takes the place of *da*.

「ジャ(ヂヤ)」は京都の話し言葉や舞台の言葉で、東京人は使わず話し言葉を活字にしたものでもよく「ダ」に代わって使うということである。つまり、『BOTAN TŌRŌ』で「ダ」への変換は、当時東京での新しい言い方として「ダ」を意識したものと思われる。

3. 2. デゴザル系

対等か目下に用いる「デゴザル」は、『牡丹灯籠』で1例、推量「デゴザラウ」・否定「デゴザラン」が各々1例ずつ用いられている。上位の話し手が下位の話し手に対して、故意に敬意をあらわす言葉遣いをすることによって、話し手の尊大さを誇示する。

(37) 誠に熱い事でおとくさまの御病氣ハ如何で御座るナ(飯→相)3編 36才^⑩

(38) 此方の孝助殿あれハ忠義の者で以前ハ然るべき侍の胤で御座らう(相→飯)
3編 36才^⑩

(39) 拙者も飯島を殺す氣でハ御座らんが(源→り)12編 19才^⑨

「デゴザイマス」は137例、「デゴザリマス」は7例、「デゴザイマシテ」(2例)、「デゴザイマシタ」(8例)、「デゴザイマセウ」(11例)、「デゴザイマスダラウ」(1例)、「デゴザイマシタラフ」(1例)、「デゴザイマスナラバ」(1例)、「デゴザイマシタレバ」(1例)、「デゴザイマスレバ」(2例)、「デゴザイマセン」(4例)、「デハゴザイマセン」(7例)、「デゴザイマスル」(1例)、「デハゴザイマス」(1例)の形がみられる。

(40) 手前ハ元牛込の飯島平左衛門の家来孝助と申す者でございませう(孝→良)
11編 2才^②

(41) それでハ逆も御見物ハで出来ませんでございませう(五→り)12編 16才^⑨

(42) 悪い奴でございませうが強て縋り付て参り私故に御隣屋鋪の源次郎さんが勘當をされたと申すから義理で據所なく置きましたもの、嘸尊母はお厭でございませう(五→り)12編 16才^⑨

(43) 誠に恥ずかしい事でございませうが(国→り)12編 16才^⑩

(44) 平左衛門が手槍にて突てかかる故やむを得ず斯の如きの仕合でございませう
仰せに従ひ早々逃延改心致して再びお禮に参りますでございませう
(源→り)12編 19才^⑨

(45) お國やその孝助ハ私の爲にハ實の倅でございませう(り→国・源)12編 17才^⑩

(46) 私はお國にあつて緩くり咄しがしたいから用もあるだろうが例もより少々

見世を早くひけにして寐かしておくれ私は四疊半へ行て國や源さんに咄し
があるのだ(リ→五) 12編 16ウ⑩

(40)から(44)のように、普通目下の話し手が目上の聞き手に対して「デゴザイマス」を使う。ところが、(45)のように、目上が目下に使う場合がある。これは、身分の差に因するものではなく、心理的に疎遠であるため「デゴザイマス」を用いている。再婚して間柄が遠く感じられる娘国には「デゴザイマス」を用いる一方、りえがずっと育ててきた息子である五郎三郎に対しては(46)のように「ダ」を用いるのである。心理的な距離感が文末の指定表現に反映されたものと思われる。

- (47) 全く孝助ハ盗らないやうに御座い升お腹立の段ハ重々御尤もで御ざりますが
御手打の儀は何卒二三日迄お日延の程を願ひたう存じます(源助→飯)6編 34ウ⑩
- (48) 間違ひでござります(孝→飯)6編 39オ⑤
- (49) 此疵も其時打れた疵で御ざります(孝→相)6編 45ウ①
- (50) 此者ハ御尋者にて舊罪のある重罪の奴でござります(捕方→孝)11編 3ウ⑩

上の(47)から(50)は『牡丹燈籠』における「デゴザイマス」の用例である。(47)(48)(49)は奉公主や義理の父に頼みごとと自分の潔白や悔しさを訴える場面で、(50)は捕方が侍に対して報告をする場面である。目上の人に対して物事を郑重にいう際の文末として用いられる傾向があるといえる。

3. 3. デス系

『牡丹燈籠』における「デス」の活用形は、用例(51)から(59)のように、現在形「デス」(131例)、過去形「デシタ」(3例)、未来・推量形「デセウ」(3例)がある。(60)から(74)の用例でみられるように他の指定表現より「ヨ」「ネ」などの終助詞が付く用例が目立つ。特に、話し手より聞き手が低い身分や親しい人物に「ネ」「ヨ」「ナ」「カナ」などの終助詞を加えて表現を柔らかかにしている場合が多い。

また、(74)～(78)の用例のように「デス」に「カラ」のような接続詞や形式名詞「モノ」などが加えられる場合もある。

- (51) 隣の白翁堂です(勇→新)3編 44オ④
- (52) 化粧をする婆もお鐵漿はぐろを付けるやら大變です(相→飯)4編 5ウ①
- (53) 最早一刻も猶預致す時で御座いませぬゆゑ明早天出立致す了簡です(孝→相)
7編 8ウ⑤
- (54) 山本志丈さん誠に久しく御めにかゝりませぬでした(ます(峯)^{*8}→志)9編 29オ⑦

- (55) 様に御用でハなく貴^{あなた} 婦に内証に御用でせう(孝→國)2編 26ウ⑦
- (56) 早速娘に申し聞けましたら嘸悦ぶ事でせう(相→孝)3編 39ウ⑪
- (57) 誠に怪しからん事です(源→り)12編 17ウ⑬
- (58) ヲヤそうかへそれハ何にしても目出度い事です(り→孝)11編 12ウ⑩
- (59) 何も取て居る隙もありませんでした(り→國)12編 17オ⑨
- (60) 誰が居るものですか(相助→源)12編 23オ⑩
- (61) 早う入たつしやいました何か御用ですか(新→勇)3編 45ウ②
- (62) 私が斯様に喧嘩をしたのを御覧遊バして又私が失錯のですかナア(孝→飯)
4編 11オ③
- (63) そうですかへえ(久→峯)8編 18ウ③
- (64) 思人の思ひものをそんな事して憎い奴だ人非人ですネー(相→孝)6編 45オ⑨
- (65) へんな塩梅ですな(文→伴)8編 26ウ④
- (66) 貴^{あなた} 所なんですネー(米→志)1編 12オ③
- (67) どういふ御疾病ですナ(飯→相)3編 37オ⑥
- (68) ナニサ夫は燈火で見るから輝るのですハネ(志→米)1編 12オ④
- (69) 皆^{わたくし} 妾 が側で殿様へ甘く取りなし貴君を能く思はせてのですヨ(國→源)
2編 23オ⑩
- (70) お國さん誰か来た様ですヨ(源→國)2編 25ウ⑧
- (71) 先生萩原様ハ大變ですヨ(伴→勇)3編 42ウ⑭
- (72) 御目にかゝるとも出来ないと思て居る所へお使で餘り嬉いから飛んで來たん
ですよ(國→伴)9編 32ウ⑩
- (73) 誠に思ひがけない貴^{あなた} 郎^{さま} 様 ハお 亡^{なくな} り遊バしたといふ事でしたよ
(米→新)3編 32ウ⑥
- (74) 行水も遣ハないで毒ですヨ御寝衣しも汗でビツシヨリになつ
て居りますから御天氣ですから宜う御座います(米→新)5編 29ウ①
- (75) ご縁組になる時に奥様に附て來た女でございますが其後奥様
がお隠れになりましたものですから(孝→り)11編 10オ⑫
- (76) 親切な忠義の女中と只二人ぎりですからだ戲談でも申して來ませう(志→新)
1編 8オ⑭
- (77) 今時分掃除屋が参りますものですから粗勿を申しましたが(善→孝)10編 3オ⑤
- (78) そんな事ばかり仰しやツて私の傍へ來ない算段ばかり遊ばすのですものを。
(國→源)2編 23ウ⑦

聞き手と話し手との階層の差が大きい場合や身分が高い人との会話の中でもある

程度打ち解けている状況では「デス」を用いている。最上級の社交につぐ話し相手に対する話し手の、礼を失しない範囲でのくつろいだ気持ちを表わすともいえる、<表 1 > で表れたように「デス」を用いるのは、女性が 45 例、男性 83 例で、男性が優勢であり、明治 10 年代には男性にも広く普及されたと思われる。

この「デス」は、上の(51)～(78)の用例にみられるように、ほぼすべての登場人物が「デス」を用いている。当時に発刊された『雪中梅』(末広鉄腸、明治 19 年)・『浮雲』(二葉亭四迷、明治 20 年)・『小公子』(若松賤子、明治 24 年)をみても、階層・年齢・男女問わず用いており、すでに「デス」が一般化されていることが推定できる。

松下大三郎(明治 33 年)が、「デス」の項目に「ダに等し。たゞしダは對者不定遇なれどデスは對者尊重遇なり」と述べている通りに、社会の雰囲気合うちょうど適当な敬意の度合を持っていることが、⁴⁹ 定着した原因とみられる。

3. 4. デアル系

「デアル」は、活用形として「デアル」(現在、6 例)・「デアツタ」(過去 10 例)・「デアラウ」(推量・未来、8 例)の三形が行われている。「デアル」は、対等以下の者に対して使用されている。<表 1 > でわかるように、『牡丹燈籠』で女性が「デアル」を用いる例はなくもっぱら男性専用である。特に、侍や僧侶・医者自身が低い者に、または目下の人に用いている。

- (79) 何故早くいはん希しからん奴だ不幸ものである(相→徳)3 編 36 ウ⑩
- (80) 己が間違ひであつたのだ(飯→孝)6 編 35 才⑧
- (81) 澤山の施主もあるまい一人か二人位の事であらう(良→孝)10 編 2 ウ②
- (82) あの折ハ大きに御世話さまであつたノウ(孝→善)10 編 6 ウ③
- (83) 毎日案じるのみであつたが誠に皆なの達者な顔を見るといふハ此様な嬉しいことはない(孝→徳)10 編 5 ウ③

次の用例(84)(85)のように、「デアリマス」を女性はたった 3 例しか用いていない反面、男性は 39 例も用いている。これは、りえが源次郎と国に仇である孝助が自分の実の息子であることを明かす場面で、昔の出来事を説明している。

- (84) 御家來で御馬廻り役を勤め百十石頂戴致した黒川孝藏といふ者でありました(り→国)12 編、18 才⑬
- (85) 十九年ぶりにて倅の孝助に逢ひましたが實の親子でありますゆえ段々様子が聞てみるとお前達ハ飯島様を殺したうえへ(り→国)12 編、18 才⑯

「デアリマス」は 15 例の使用例の中で(84)(85)の 2 例を除いては、(86)(87)のように主に男性が用いている。なお、地の文で「ダ」に次いで「deal」系が使われているのが、<表 1>でわかる。次の(88)から(90)は地の文の用例である。

(86) 嘸マア残念な事でありましたらう(志→伴)9 編 28 ㉞

(87) 途中で逢ても顔も分らぬ位でありますから一緒に居りましても互ひに知らずに居りましたかナ(孝→勇)11 編 6 ㉟

(88) 一体は古方家でありますれど實ハお幫間醫者のお饒舌で諸人救助のために匙を手にとらないと云ふ人物で御座いますれば(地の文)1 編 8 ㊱

(89) 而して當時ハ若殿と草履取とは權勢が雲泥の違ひであります(地の文)2 編 27 ㊲

(90) 残暑強い時分でもありますから於國ハ殿様の側で出來たての(地の文)3 編 35 ㊳

『口語法別記』には「デアリマス」について次のような記述がなされている。

「であります」わ、「です」よりわ丁寧な言いようであるが、演説などの外にわ用いられぬ。「でございます」わ、「であります」よりわ、又丁寧に云う場合に用いるのである。(p. 322)

つまり、「客観的な叙述の文末辞が求められるところから、『である』が採用されるに至ったのであろう」^{*10} といえる。

(91) トーンと突衝たから犬でもあるかと思へば此不下郎めが居て地べたへ膝を突かせみなさる(藤→飯)1 編 2 ㊴

(92) 如何にも麻布邊から事故おツくうでもあり且つ追々熱く成て來たゆゑ(志→新)3 編 31 ㊵

(88)(90)～(92)のように、「デ」と「アル」「アリマス」の間に「ハ」や「モ」を入れて用いる場合もある。

3. 5. その他

今まで見てきた指定表現以外に『牡丹燈籠』に見られる指定表現には「デグス」・「デゴゼヘヤス」がある。まず、「デグス」の用例を示してみる。

(93) 又一人がなんでグスネー(通行人)1 編 3 ㊶

(94) 結構な御住居でげすナ(志→米)1編9才③

(95) イヨお洒落でげすネ(伴→新)2編19才⑥

用例の中の「デゲス」を「デス」に置き換えても不都合ではなさそうである。上の「デス」の特徴の一つである「ナ」「ネ」といった終助詞が付くのも類似した用法である。この「デゲス」は国語調査委員会の『口語法調査報告書』(明治39年刊)の第37条によると、当時は茨城県で「デゲス」が行われたという報告がある。

(93)は、若侍の飯島と酔っ払いの侍黒川が口論をしているのを見ている野次馬の台詞で、面白がっている。(94)の会話の前後には、医者である志丈が侍の令嬢の下女である米にずっと「デス」を用いていた。また、(95)の用例の前後の会話にも新三郎の使用人同様の伴蔵が浪人である新三郎に対して「デゴザイマス」「デス」を用いていたが、突然「デゲス」という言葉を使う。この「デゲス」は一般的ではなく、江戸時代まで「デゲス」が芸人や職人の間、または通人ぶる人によく用いられたという。これらの事実から、「デゲス」は「打ち解けた場合に用いられる」ととどまらず、加えてじゃれた言い方(気持ち)が含まれているのではないかと想像されるのである。明治3年から9年にかけて発刊された『西洋道中膝栗毛』にも通事である通次郎や町人の弥次郎がふざけている場面では「デゲス」用いている。^{*11}

次は「デゴザイマス」の変化した形に見える「デゴザヘヤス」の使用例である。(96)から(99)までが「デゴゼヘヤス」、(100)がその否定形である。これはもっぱら伴蔵が用いている。

(96) 伴蔵でごぜへやす(伴→勇)3編42才⑨

(97) お前さまで御座いますかというから私が伴蔵でごぜへやすと云つたら(伴→米)4編15④

(98) 家來かと聞くから家來同様な譯でごぜへやすといふと(伴→米)3編15才⑤

(99) 先生伴蔵でへやす一寸御明けなすつて(伴→勇)7編3才⑦

(100) へい全く違へごぜへやせん(伴→相・孝)11編3才④

上の用例は伴蔵が人相見である勇済や米・侍の相川と孝助に対して使っている。「デゴザイマス」と入れ替えてもよさそうなところで、聞き手に対する敬意が認められる。

『西洋道中膝栗毛』にも「デゴゼヘヤス」「デゴザヘマス」の例がみられる。すべて田舎出身の町人である弥次郎や北八が自分より身分の高い人に対して用いている。^{*12}

次の(101)(102)は「デゴゼヘマス」と「デゴジイマス」で、これも「デゴザイマス」の変形のように思われる。相助という源次郎の家の奉公人が若旦那の源次郎に対しての言葉であるので、「デゴゼヘマス」同様敬意は認められる。

(101)これハはやモウどうも眞成ほんとうでござへますか(相助→源)4編3オ③

(102)なんですと孝助が養子になると憎こひ奴でございます(相助→源)4編3ウ③

上の用例(96)～(102)は、話し手の出身地の方言である可能性が考え得る。ところが、ずっと方言を使うのではなく、最初は行儀などに用心して「デス」や「デゴザイマス」を使っていたのが、一瞬緊張が緩んだ場面でさりげなく使う傾向が窺える。

4. 階層別・性別による指定表現の使い分け

『牡丹燈籠』における、物語の発端となる第一回は、寛保3年(1743)から始まり、2回からは18年後である1761年から2年間にわたる物語である。その背景が江戸中期に当たるので、登場人物は次のような分類が可能である。これは、同一待遇意識によって支えられている指定表現の使い分けがどうなっているかを調べ表にしたものである。

登場人物を次のように男女別・階層別に分類して、どういう指定表現を用いるかを示してみた。〈表2〉の階層別の欄の数字は下の分類によるものである。

1. 武士階級：〈男〉飯島平太郎〔飯〕－牛込の旗本/黒川孝蔵〔黒〕－素行がわるく酒色に耽っている悪侍/萩原新三郎〔新〕－浪人/宮野辺源次郎〔源〕－隣家の旗本の次男/相川新五兵衛〔相〕－没落したお侍
〈女〉お露〔露〕－飯島平太郎の娘/お徳〔徳〕－相川新五兵衛の娘
2. 準武士階級：〈男〉山本志丈〔志〕－太鼓医者/良石和尚〔良〕－和尚
3. 町人：〈男〉藤村新兵衛〔藤〕－刀剣屋の亭主/伴蔵〔伴〕－貧しい町人であったが後に店を構える/勇齋一人相見の名人〔勇〕/久蔵－伴蔵の甥〔久〕/五郎三郎－お国の兄〔五〕
〈女〉お峯－伴蔵の妻〔峯〕
4. 使用人：〈男〉相助－宮野辺家の下男/善蔵〔善〕－相川家の下男/亀蔵〔亀〕－田中家の下男/源助〔源助〕－飯島の下男/文助〔文〕－伴蔵の下男/仲助〔仲〕：伴蔵の下男
〈女〉お米－お露の女中〔米〕/竹－飯島家の女郎〔竹〕/きみ〔き〕：飯島家の女郎//婆－お徳の乳母/ます－お峯の下女であるが、死んだ蜂の霊にとりつかれる

5. 身分に変化がある人物：孝助〔孝〕：(飯島平太郎の下郎→侍)/
 お国〔国〕：町人の娘→下女→武士の妾→源次郎の情人/
 りえ〔り〕：侍の妻→町人の妻

<表2>登場人物別指定表現の使い分け

性別 階層別	男性				女性			
	1	2	3	4	1	3	4	5
ダ	飯・黒・相・孝・新・源	志・良	伴・勇・久・五	相助・源助・亀・善・仲・孝	露・徳	峯・ま(峯)	米・婆・竹	国・り
ジャ (ヂヤ)	飯・黒・相	良						
デス	飯・相・孝・新・源	志	伴・藤・勇・久・五	相助・源助・善・文・孝	徳	峯・ま(峯)	米	国・り
デア ル	黒・飯・相・源・孝	良	藤・伴・勇					
デアリ マス	新	志		孝				り
デゴザ ル	飯・相							
デゴザ リマス			捕方	孝				
デゴザ イマス	飯・新・相・源	志	藤・伴・五	孝・相助・源助・善・勇・文	徳・露	峯	米・婆・竹・き	国・り
デゲ ス		志	伴					
デゴゼ ヘヤ ス			伴					
デゴゼ ヘマ ス				相助				
デゴジ イマ ス				相助				

<表2>で見られるように、「デゴザル」「ジャ」の使用者は、武士階級やそれに準ずる階級の人のみが用いており、男性の専用語であることがわかる。『牡丹燈籠』で「デゴザリマス」は女性には用いない。使っている人物は捕方・孝助のみである。

「ダ」「デス」「デゴザイマス」は、ほぼ全階層によって用いられている。話し手が身分の上の人が下の人に、又は、親近感を持っている対等の立場の者同士で用いているのがわかる。

特に、この登場人物別の指定表現の使い分けで注目すべきものは、明治時代には対話敬語としての丁寧語が著しく発達するようになり、「デス」が幅広く用いられるようになったことである。『牡丹燈籠』における「デス」は男女別・階層別の広がり、つまり一般

化の過程をみせている。

「デグス」「デゴゼヘヤス」「デゴゼヘマス」「デゴジイマス」は、志丈のようなおしゃべりの太鼓医者・卑劣な町人・凶悪な使用人に使われているところから、用例から敬意は認められるものの、マイナスのイメージが大きいといえる。

<表2>で女性の言い方をみても、武家の女性と使用人は「ダ」「デス」「デゴザイマス」を共通的に使い、その偏差がない。使用人の中で年寄りのお徳の乳母が「デス」を用いてないことはとても興味深い。りえの場合は、他女性と同様「デゴザイマス」「ダ」「デス」はもちろん、他の女性に使ってない「デアリマス」を用いていることから、人間関係の言語的把握の仕方において、柔軟さに富んでいたことになるだろう。

ところが、<表1>や<表2>で見られるような『牡丹燈籠』における指定表現の使い分けは上の性別や階層・身分によるものだけではなく、親疎・公私や性格・年齢・心理などによる使い分けも考慮にいれなければならない。

たとえば、草履取の孝助が奉公主である飯島と初対面をする場面では、緊張して(103)(104)のようにもっぱら「デゴザイマス」(11例)を用いていたが、主人と生立ちの話しや自分の決意などを話し合っている内に緊張感が緩んだ場面では(105)(106)のように「デス」(2例)を使う。

(103)私ハ孝助と申します新参者で御座います(孝→飯)1編13㉔⑧

(104)へイ父親の死去したは私の四才の時事で御座います(孝→飯)1編15㉔⑩

(105)越後國へ往て仕舞ひましたさうです(孝→飯)1編14㉔⑭

(106)仇の十人位は顯て参りまして大丈夫です(孝→飯)1編16㉔⑬

<表1>と前の考察で見たように、「デゴザイマス」は目上の方が目下の人に対して使うのが普通であった。しかし、次のような用例はその規則から外れている。侍である源次郎が町人の伴蔵にお金を無心しようとする場面で、最初は身分的な差もあり、用例(107)(108)のように、伴蔵は源次郎に対して「デゴザイマス」を主に用いていたが、^{*13}伴蔵がお金は少ししか出さないということと源次郎を主人の敵討ちをするため孝助が探していることを知らせ、立場的に有利になると突然言い方が(109)(110)のように「ダ」に変わる。

(107)ほんの草鞋錢でございますが御受取り下せへ(伴→源)9編36㉔③

(108)幾ら計上げたらよいのでございます(伴→源)9編36㉔⑦

(109)誠に商人杯は遊んだ金は無いもので表店を立派に張て居ても内々ハ壹兩の錢に困る事もあるものだ(伴→源)9編37㉔③

(110) 早く往きなせへ危険だよ(伴→源)9編38才⑩

侍である源次郎に町人の伴蔵が「ダ」を多用するのは、階層は下であるが、心理的や経済的に立場が逆転したと思った時点からである。最初は「デゴザイマス」から「ダ」に変わるところに伴蔵の心理状態の推移がよく反映されている。これは、身分や階層によって言葉の使いわけもするが、同時に状況・心理的なことが言葉に反映する社会の雰囲気も感じさせる。

親疎による使い分けは、3. 1. 3. の例文(45)(46)の国・五郎三郎との会話で説明した通りである。

なお、話し手の人柄や性格によって目下の聞き手に対して丁寧な指定表現をする場合もある。次の(111)から(113)は、浪人である「新三郎」と人相見の勇齋の会話である。

(111) 昨夜規ひて見たものが居るのがあれハ一体何者です(勇→新)3編46丁才①

(112) 逢引したのは今晚で七日目です(勇→新)3編46丁才②

(113) 逢引するので私ハあれをゆくゆくハ女房に貰う積りで御座います(新→勇)
3編46丁才⑦

身分は、浪人であるものの新三郎が上にもかかわらず、町人の勇齋に対して、「デス」や「デゴザイマス」を用いている。これは、新三郎の穏やかな性格が言い方に反映されたものと判断される。

これまでの考察を通じて、『牡丹燈籠』における指定表現は階層・身分・性別だけを基準にして使い分けられたものではなく、心理・親疎・人の性格や人柄・感情内容なども反映された言語表現であることが明らかになった。

5. まとめ

『牡丹燈籠』における指定表現は基本的には身分・職業や性別により使い分けられているが、四民平等の意識が芽生え、その影響により人柄や親疎のような心理的な要因そして話し手の感情的な変化などが反映するようになった。つまり、身分に直結した江戸時代の敬語を保持しながらも部分的に平等な人間対人間としての関係における敬語意識に基づいた文末表現であるといえる。

その中でも江戸時代に特定階級だけに使われた「デス」の一般化する過程が確認される。「デス」の一般化は形のシンプルさや時代に合う適当な敬意を持っていたからと推定される。

身分や職業・性別によって使い分けられていた指定表現に話し手の心理的な要素や感

情の変化などの要因によって指定表現が使い分けられるようになっている点から、『牡丹燈籠』には、明治初期東京語の指定表現の実態がよく表れていると考えられる。

-
- *1 日本近代文学館編名著復刻全集近代文学全集(1968)『怪談牡丹燈籠』(三遊亭円朝演述；若林珥蔵(明治17)) 図書月販
- *2 山本正秀(1965)は、「ニュースの敏速化・西洋学術の普及などよりも、当時の不完全な話しことばの改良」ということを重視してそれを第一目的に挙げ、速記法によって話し通りに書き取り、そのまま文章にしたものをよりどころに、話しことばを改良しりっぱなものにして、次第に言語と文章と同一な、つまり言文一致の口語文体を成立させたいというのである」と述べている。
- *3 大久保恵子訳による。
- ¶ It is possible to learn to speak Japanese quite correctly without studying the native system of writing. Unfortunately the aquirement of the Colloquial does not help much towards the comprehension of books, newspapers, and letters, even supposing the student to have them read aloud to him. The Japanese are still in the state in which we were during the Middle Ages. They do not write as they speak, but use an antiquated and indeed partly artificial dialect whenever they put pen to paper. This is the so-called "Written language." Of the few books published in the Colloquial, the best are the novels of living author named Enchō. The student, who does not wish to trouble about the characters, cannot do better than write out one of these books from his teacher's dictation. It should be added that they contain not a few passages to which lady students would exception.
- *4 本稿で示す「指定表現」は、『国語学大辞典』の定義に従う。話し手が判断内容の妥当性を確定的に述べる表現である。
- *5 「デグス」はデス系・「デゴゼヘヤス」「デゴゼヘマス」「デゴジマス」は、デゴザイマス系に入れることも考えられるが、ここでは便宜上別の項目に入れた。
- *6 孝助「締りをして置いたのに如何して開たのだらう。オヤ庭下駄が並べてあるぞ誰か来たナ」のような台詞を独り言に見なした。
- *7 「ジャ」と表記したのは19例、「ヂヤ」の表記は8例である。
- *8 峯の霊が下女のますにとりついたので、言い方は峯の言い方であるとみなされる。
- *9 吉川泰雄(1977)、p. 166。「『ごさいます』体ではとかく恭しすぎるし、常体では無縁とされるような対人関係の下で談話するのが普通である社会が訪れたのであって、当時漸く一般性を有するようになっていた『です』が、適宜な丁寧体断定語として愈々使用されることになったに違いない」
- *10 安田章(1973)、p. 772。
- *11 「いやそりや西洋商法にねへことでげす」(102下6)(通→弥)

「そりや7面白いいいらんの名でげすな」(109上9)(弥→先生)

*12 「本町の旦那今お帰りでごぜへますか」(弥→大腹屋)

「外国の旅ハこんなことがほまりだとすゝめるもんでごぜへやす」(46下5、北→大腹屋)

*13 もちろん源次郎は「ダ」を用いていた。

「オヤ買ひものでハ御座らん御亭主に少々御面談いたしたく参つたのだ」9編34頁⑥

<参考文献>

國語調査委員會編(1927)『口語法・同別記』國定教科書共同販賣所(勉誠社の複製版による)

小島俊夫(1998)『新装版後期江戸ことばの敬語体系』笠間書院

佐久間俊輔(1991)「草創期の演説速記—活字化の際の改変をめぐって—」『日本近代語研究1』

ひつじ書房

清水康行(1983a)「言語資料として見た速記本『怪談牡丹燈籠』における二重性」『創立二十周年記念
鶴見大学文学部論集』

———(1983b)「鶴見大学図書館蔵『怪談牡丹燈籠』別製本について—その書誌的紹介ならびに初版
本との語法上の相違点」『鶴見大学紀要』第20号

辻村敏樹(1968)『敬語の史的研究』東京堂出版

Chamberlain, B. H.(1898) “A Handbook of Colloquial Japanese”

(大久保恵子編・訳(1999)『日本語口語入門』第2版翻訳:付索引、笠間書院)

中村通夫(1948)『東京語の性格』川田書房

長崎靖子(2001)「明治期の速記資料に見る『です』」『日本語論叢』第2号、日本語論叢の会

飛田良文(1969)『『西洋道中膝栗毛』における指定表現体系の実態』『月刊文法』昭和四十四年十二月
号、明治書院

福沢諭吉(1897)『新訂福翁自伝』福田正文校訂(1978)岩波書店

松下大三郎(1901)『日本俗語文典』誠之堂

森岡健二他(1964)『講座日本語2 現代語の成立』明治書院

吉川泰雄(1977)「助動詞『です』の発達について」『近代語誌』角川書店

山崎久之(1963)『国語待遇表現体系の研究 近世編』武蔵野書院

山本正秀(1965)『近代文体発生の史的研究』岩波書店

(ソン・ユンア 大学院人文社会系研究科 博士課程3年)